

不運なる幸運、時代に魁ることの

フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩 完

森 田 孟

マーク・アサトン Mark Atherton

本稿は本誌前号に引き続き、南北戦争期を挟む十九世紀中葉のアメリカはニューヨークランドの一郭で殆ど 隠遁生活 を送った孤高の詩人フレデリック・ゴダード・タッカーマン（Frederick Goddard Tuckerman, 1821-73）の詩業の、本邦初の全訳紹介によって、この文学史上浮上しかけては沈み込んできた詩人の世界に光を当てたいと希う筆者の試みの完結篇である。定本はこれまで同様、モマディ編の『フレデリック・ゴダード・タッカーマン全詩集』以下、『全詩集』と略記（本稿末の「参考文献」参照されたい）とし、各作品の収載箇所を（C.P.110）の如くページ表示する。

★

故意に不正を行おうとした と言っても
欠乏に迫られたとか 切羽詰った必要によってとか
ある人が述べたことがあるように 隠された手に
駆り立てられたようにみえるとか 憎悪や
傲慢な怒りに煽られたとか 黄金欲に目が眩んだわけでは
ない人についての物語だ。とは言えこういう事柄の全てが
結局は彼を動かしたのだ、彼は若い時
骨が固まらないうちに 血が冷たくなる前に
というのも若さとは 素早く瞬時にさえ 風の一吹き
偶然の一言ごとに 変化しやすいものだから
何日も何か月もの間の暑さ寒さを凌ぎながら

穏やかに静かな足取りで自らの目的に邁進したのだった、はらはらするような速度ではなかったが恐ろしいまでに馬で丘を駆け降りる人のように。

ベタイア、もしくは 彼女を愛した人々の好みの呼び方によれば ベルタは 美しかったからだがベルタ・ウェストブルックは森に咲く花で荒野のニューイングランドの荒涼たる森林や湿地で震え続けていた、魔術の跋扈する インディアン(1)の謀略と戦争が仕掛けられる 野蛮な暗黒時代のことだった。とは言え、これ以後はなかなかのもので 夜になるとしばしば ウェストブルックの小屋は標識の星となつてあまたの高鳴る心を誘つたので 求愛者は引きもきらず遠方から贈物や獲物を携えてやつて来た、それでその老人は火を感じ、一氣に話したくなつてフィリップ戦争(2)やサカスについて語つたものだった。更にド・ルーヴィル(3)が こちこちの雪を渡つて冬の朝の悲運を負わされたディアフィールドへ交互にどつと急いだり立ち止つたりして向かつた様子についても、まるで疾風が空しく吹き過ぎて

前哨地を誑かしたみたいだった、また、夜になると孤立した小さな要塞と丘の辺りを

斥候のインディアンが狼のように徘徊して

火を投げ入れる隙間を探し回る有様について。

遂には家畜小屋や原野の 声を殺した生き物たちが

忍び寄る敵に逸早く氣付いた証を示すのだった、

牛馬は戦士の人体塗料を嗅ぎ分け、屋内では

犬が毛を逆立て 鼻を鳴らし

窓辺の風のように猫は悲し気に啼く といった具合に。

こういう事柄や命からがらの逃走について ウェストブル

ックは話したものだ

過去について語るように。「何故って今や」と彼は言つた、

銃撃され、頭皮を剥ぎ取られ、四方八方へ散り散りに逃走

している、
「部族は

彼らの樹皮で覆われた舟は突き破られて沈み、彼らの住居

は燃やされ

作物は、栽培中の土地さえも、没収されたし

彼らは殆ど勢力を得られず、インディアン戦争は終つた

のだから、ただ、それまでは、おそらく、長い夜な夜な

僻地の孤立した農場からは獺猛な野蛮人にかげられた火が立ち昇つては 悲鳴が上つたかも知れなかつた！

分隊はここに駐屯していて尚噂されていたのだから

北部 には はぐれ者たちが屯たむろしていると。でも今では大抵は打ち破られていたので 最善とは思えなかつた、彼らを練り混ぜ摺り碎いて塵そのものにしてみても」と。

それからその老人は語りながら 己が娘の方に向いて苦々し気に話したものだ

あの最も憎むべき裏切りの罪について、偽りの友情とあの内輪の反逆について、

その点では北米インディアンは信用できないし無慈悲だが白人よりはましだと、それから長いこと間を置いたままベタイアを 座っている場所ごと凝視めて

その娘をたじろがせ、額に浮かべさせたものだ

苛苛した色を、それでマークは、マーク・アサトンは、自らの暗いおどとした眼にはつきりした表情を

呼び戻そうとしているようにみえたので ようやくその老

人は眼を伏せた。

ここにいるのは恋人同士ではなかつた、長らく友人とは看

做されていたし

この二人は結婚するだろうという声は行き交つていたが確かに恋人同士ではなかつた、それでもその若者は耳を傾け 笑おうとしていた、彼は十分に話せたのだから

滑らかに言葉を 意味を 切れ味鋭く籠めて、

ミルクや油に包み込まれたがりつとくる酸のように。

他の者たちも澄ましていた、が それでもその乙女は聞いていながつたか、聞いてはいても心半分に聞いていた依然としてもう一人が その二人の間にいたのだから黄昏と夜明けの、別々の日目の

伴侶として、彼女を愛していた者は その時

真摯な愛情を抱いていたのだ 彼の希望、彼の星で殆ど愛人として、それでその乙女は見ていたのだったこちらを、そしてこちらをと、別別の眼で。

森へとマーク・アサトンは馬を乗り入れた。

川端の居住地を後にして

伐採地を 焼き払った土地を 通過してどんどん

聳え茂るシダと藪を突き抜けて

開けた森林へ着いた、それから更に突き進み、

ぬるぬる滑る斜面を登り、がたがたと

石だらけの窪みへ降りていった、馬の蹄の下から

内気な蛙が飛び出し、かと思うと、一条の光のように

栗鼠が苔むした木の幹を駆け登った、

そこには 上を下を左へ右へと見回しながら

こつこつ叩きぶら下っていた カンムリアオゲラが。

甚だ猛然と駆け続けて、彼はようやく思い巡らした、

自分の目的を、それは実のところ あの乙女の愛を得て

彼女の豊かな愛を悪用し彼女をインディアンの酋長たちに
売ることだった、彼らは部下の戦士たちと陰に潜んでいる

のだった

今や一粒の哀れみと共に彼女の美しさに基づく

二人の長年に及ぶ友情とあの結婚の誓い

それを 彼の心が嫌悪したのだ、彼は或る人のことも考え

ていた、

一度は彼が少年の頃に夢見た心の偶像だったのに、

天国が秘蔵するのに余り相應しいと思えない人のことを、

今ではイワツバメの巢 のようにみえるがそれ程清潔で

ない

よりは確かに大きな家に閉じこめられている

かつては美しい細っそりした娘だった それなのに彼女

を見てごらん、さあ！

十人ばかりの子供たちが彼女のガウンの裾を攫んで引っぱ

っている

窮乏する以前のおてんば娘だった彼女そのままに

それで彼は心を頑なにしてお綱を引き

堤を前に馬を止めて水辺を捜した

アメリカシヤクナゲを掻き分けて 汝の顔を見ようとした

ニューイングランド の流れを、暗い 松の川 を！

そこに横たわって耳を傾けていた 黄昏が降りてくるまで

木の葉のはためきに 岩の上に

細波がかぶさるのに タイランチョウが

もの悲し気に呼ぶのに うんざりすると

彼は歌うのだった 恐れ半分、からかい半分に

「川岸は高く、夜は暗い

すると白く美しい手が我らが小舟に近づいてくる

今晚、今宵、風は我らの呼び声に従い

静かな暗い川は滝のように吸い込む音を立てる
下流を丸木舟で我らが旅する時に、
牧師の娘と執事の妻がいるのだから、

さあ漕いでゆけ！

いずれの岸でも彼女が優しく励んでいるので
憶えておこう、忘れまい あまた舟着き場はあるのだと
だから恐れるには及ばない 関わり合つた 友人は、
恥ずることなく認めよう 心中に潜む愛情は、
惜しむことなく差し出そう 我らが最上の部屋は、
その時その家 土台から棟覆いまで彼のもの、

さあ漕いでゆけ！

するとこの歌の律動に応じたのは
素早く反応する幅広の刃の突進だった

それと忌わしいばかりに顔を彩り貝殻玉装飾⁽⁴⁾を着けた
哀悼の深刻さも何のそのの顔付きをした

インディアン⁽⁵⁾の酋長で、乗っていた舟から飛び出して
喚び出された悪鬼そのまま立ち塞がった。だがアサトンは
ひゅうひゅうひゅう鳴り続ける樺の木に終日ちかちか光る

冬の葉さながら青ざめた頬をしていたが
顔色を取り戻そうと一瞬の間だけのように
項垂れた、それから断固たる様子で
それ相応な挨拶をその森の王と交わして
彼らは流れの傍らで交渉に入った。

赤い光が西方の境から分れて
夜の帷が暗々と降りたが、その前に再び素早く
その騎士は飛び去った、^{シェイド}陰の中に影となつて。
すると今や全く、まるで事実そのものであるみたいに
川の悪魔どもが彼の通い路に集った。

彼が馬を走らせてゆく間ずっと婦人の金切り声が
響いて 松の木々の中を追跡してくるとみえたのだから！
それで彼が見ていると 一人の婦人の顔が浮かび出た
唇には唾液の泡が光り、鼻孔は血で縁取られ、
ひたすら激しく訴えかけている、そうみえたのだ、
引き続き馬を駆ってゆく間も 絶え間ない音が
彼の耳元で鳴り響いていた 黄金がりりんりん鳴るように、
しかも迷いも去りもせず草隠れに
夜のコオロギがリンリンガチャガチャたてる

夥しい鳴き声のようだった、彼は齒がみした。

しかしそこでさえ、森は切り開かれていたので

更に進んでゆき、仄暗く不確かなきらめきの中で

あらゆる恐ろしい不明瞭なもののそっくりの

黒く焼け焦げた切り株と砲弾の

そばを疾走して 彼は矢来^{（5）}の杭に達した。

別の日の夜のこと、その年も晩くなって

一人の青年と乙女が まさに暗闇にならんとする時

幽霊の出没する流れのそばに立ち止り、うろつきながら

語り合っているうちにいつの間にか近づいて行つた、

森から突き出た突端の藪に、

黒いヤニマツ^{（5）}の細径にして待ち伏せ場所に。

二人の様子はそれぞれで、彼は気分が沈みがちで

心が昂つて当惑し打ち拉^{（5）}がれてむつつりと大股で

歩いていて、彼女はといえは悲し気ながら決然たる様子で

己が決意で青ざめていたが 癒しようのない

損害を和らげようと努める人のように優しく

話しかけていた、まるで怒れる友に向かつてのよう

出かけてくる前の彼の昔からの愛情を思い出しながら。

「別れは致し方ないわ」と彼女は言つた、でもこれは私たちの愛への悲しい暇乞いではないでしょう？

私たちの友情の全てへの不吉な告別なんかでは？」

次の瞬間、しかもその言葉の暖いうちに

彼女は足元から引き攢われ両腕を縛られ草で口を塞がれて

彼らに森の繁みの中をずっと引き摺られていった。

それでアサトンは 彼 この

川岸と流れの酋長と全く二人きりになってようやく

受け取つたのだ これまで一部は所有していたものを、

彼の不正の悪しき報酬のことごとくを。

それから まるで事は今やすつかり終つて

信頼という贈物から解放され 挑戦し合うかのように

二人は黙つたまま別れた、一方はその径をそのまま辿り

もう一方はゆつくり 村へと向つた、

それから警報を発し、召集ラッパを吹き鳴らし

荒野の探索へと乗り出した。

足を踏み鳴らしながら

彼は彼らを 川へと導き、そこで、と彼は言つたのだが

連中は彼女をぐいぐい流れを引き摺つてゆき土手へ押し上

げたのだと、

それで自分は後をずっと追いながら　まさにその流れへと入ったが、足を錨水⁽⁶⁾に滑らせ

銃を濡らし、石と石の間で傷つき

自分は彼女を命懸けで守るうとしていたのに、

突然あつという間に見失ってしまった、今やますます暗く連中は前方遙か彼方だし、その踏み分け径は昼なお見定め

難しいもの、

これ以上何が出来ようか、武器と人を集める以外に、
広く偵察し　明るい朝になるまで見張る以外に、と。

それでウエストブルックは、子供を奪われた老人として
激怒したかと思うと絶望の余り呆然と口もきけなくなり
走り回ったり　詮無き悲嘆のうちに立ち尽したり。

今では　モウズリー⁽⁷⁾麾下の一隊と共に行軍して　未開人を
力で支配しようとした時のようになわけにはいかない、

あの時は、火のついた剣のようになって更に二十人と共に
彼は彼らの首を襲い　打ちのめしたものだつた、

あるいはウィンズロウ⁽⁸⁾の下、あの破れかぶれの時代には
敵のインディアンに襲われて敗れ

戦場の煙の中に　彼は孤りぼつちで胸壁の上にいるのに

気付いたものだつた　逆茂木を越えて反撃せんものと。

喪くなつてしまったのだ　彼の力は、そして日々が過ぎて

ゆくにつれて心も喪くしたようにみえた。彼は寢床を捜し

そこに行つた、日々の過ぎゆきのうちにも一つの顔しか

見ることなく、動きを止めてしまった、そして

溺れている人のように小川の底に横になりながら

太陽を凝視めているので、やがてそれは更に小さくなって

灯火のように点滅し、それから消えてゆくことになる。

こうして彼の希望は縮んでゆき闇に落ち込んでいった。

日々は過ぎ去つたが　やはり何の消息もなかった。

くすぶつていた戦^{いくさ}が新たな炎の中に勃発して

あらゆる希望を打ち砕いた、遊撃兵たちが戻つてきて

マサチューセツツ州全域を西へ北へとうろつきながら

遠くはカナダまで森を一掃してゆく

捕虜をあまた次々受け戻し、奪い返した、

しかし彼女、彼の生命^{いのち}の栄光は、消え去つたままだつた。

それでも　ある冬の朝、太陽が

あの　川　を横切つて西の方へ進んでゆくうちに

突然　思いがけない出来事が起きた、慈悲が訪れたのだ、

そうしてウェストブルックは心を占めていたその娘を抱き

取ったのだ、

萎れて蒼白だったが、それでもやはり 森の花 だった！

友情に富む或る種族の一行が 連れてきてくれたのだ、
彼らは病んで瀕死の彼女を酋長たちから引き取って
長らくの看病の挙句、親切にも家へ連れ戻してくれて
何の報酬も求めなかった、

そして突然の復讐が行われた

彼に、あの裏切り者に、だが 彼が危害を加えた人々によ

るのではなく、

何しろ彼は即座に シーダー⁽⁹⁾の沼地へ逃げたのだから、
彼のインディアン⁽⁹⁾の盟友がそこで彼を捕縛したのだ、
そして戦いの後、自分たちが殺されたことに憤慨して
そこ、シーダーの沼地の暗闇で

彼らは彼の肉をゆつくり燃やし 彼の骨を黒焦げにした。

かくしてかつての日々には 神が全てを領^しりしめていた、
復讐は完璧だったし 悪は正義に戻るのだった、

慈悲は愛に応え、喪われたものは見つかった、

そして裏切りはこうして報われたのだ 裏切りによって

(CP.149-56)

1. Philip's war. 有名な King Philip's War (キング・フ
イリップ戦争) のことだろう。米国のロード・アイランド
州ナラガンセット湾沿岸に住んだ北米インディアンのワン
パノアグ族 (Wampanoag) 酋長キング・フィリップを
首領とする先住民とニューイングランド植民者との戦争
(一六七五 七六)。

2. Sassacus. ニューイングランド地方南部にいたピー
クオット族 (Pequot) の酋長。彼の率いる先住民と英軍
兵士や友好的な先住民族に助勢されたコネティカット州の
入植者との戦「ピークオット戦争」(Pequot War) でピー
クオット族は敗北し離散した。

3. De Rouville. Maj. Hertel. タッカーマンが結婚以来
死まで二六年間居住したグリーンフィールドのすぐ南にあ
る町ディアフィールドは、一七〇四年の厳冬の際中、二〇
〇人のフランス兵とカトリック教徒になった一四〇人の先
住民を率いたエルテル・ド・ルーヴィル少佐に襲撃されて
町の大半は焼失、四九人の住民が殺害された。(BE、二
四八 九)

4. *peag* = *wampum* (ウオンパム) 貝殻で作った円筒形の玉に穴をあけて数珠つなぎにしたもの。北米先住民が通貨や装飾に用いた。

5. *pitch pine*. 松ヤニを採るマツの総称。

6. *anchor-ice* = *bottom [ground] ice*. 水面下で船底につく氷。

7. *Mosely*. 植民地の指導者の一人とは文脈で判るが未詳。

8. *Winslow*. *Edward* (1595-1655) 英国のアメリカ植民地開拓者でプリマス植民地総督 (1633, 36, 44) が、あるいはその息子 *Josiah* (1629?-80) ニュープリマス植民地総督 (1673-80)。

9. *cedar*. 旧世界のマツ科ヒマラヤスギ属の数種の木の総称。

* 先住民たちと確執・抗争を続けていた頃のニューイングランドの植民地の、花の精のように美しい娘を巡る青年の物語。人間の複雑な在り方の一端を垣間見せる一挿話が、川の流れに「汝」の顔などと呼びかけて不意に思わず識らずといった趣で自然との同化ぶりをも示す語り手によって、

伏線を一つ二つと張られながら展開される。

第三連で老人が語る「裏切りの罪」「内輪の反逆」は、ベルタとマークの二人を怯ませるが、この箇所は一瞬、この物語の後日譚かと思わせられるような伏線である。二人は「確かに恋人同士ではなかった」とされるが、マークが裏切りによってベルタを先住民の酋長に売り渡すのは二人の長年の友情と「あの結婚の誓い」を「彼の心が嫌悪した」からだである。それにしても、マークには少年の頃に「心の偶像」だった女性 今人妻となつて多くの子供に纏いつかれている がいたし、ベルタには「伴侶として」「殆ど愛人として」「彼女に真摯な愛情を抱いていた」人物 これも一瞬、そこに居合せているマーク以外の青年かと思わせられるが、これは老父のウェストブルックを指すのだろう が存在する。当然、父親への彼女の思いは深かった。

マークが「その森の王」と「流れの傍らで交渉に入つた」後引き返してゆく途上、彼の心には、「別の日」に実際にベルタが攫われる有様が髣髴とする。これも後日の先取りで、伏線 である。

語りが時間軸に沿つようにみえながら、前後に、更には

左右にも、さり気なく移動しながら進行するのは、他の作品、個々のソネット、及びソネット群にもしばしば見られるタッカーマンの一つの特色である。それは、処々に、一種の 曖昧 を生み出し、読者を立ち止まらせることになる。これは、優れた文芸作品には必須の要素なのだが、その要素の在り方にタッカーマンの場合余りにも、慧眼の士には認められてもその慧眼を通じて広く一般に認知されるには到り難い性質があつたものと思われる。その性質とは何だつたのか。

この「長いブランク・ヴァース」「弱強五歩格無韻詩」のメロドラマ（Ⅰ・五六）は、「ロトゥルダ」「中世のカール大帝宮廷での話 エマソンの尽力で当時の有力な文芸雑誌に再録された（Ⅲ60）」共々エマソンの関心を惹いた如何にもアメリカらしい主題であつたが、植民地村落対原始森、文明対未開、といった対比からも当然ホーソンの興味を掻き立ててしかるべきものと思われるのに、彼はこの作品には特に言及しなかつた、ソネットの全て共々「見知らぬ人」「ピコメガン」「マルギテース」には大いに感動したと述べたのに（Ⅰ・五六 五七、G・一二八）。

この辺りの微妙な 差 は、唯単に「マーク・アサト

ン」一篇の 質 だけに關わることはなさそうだ。

因にワインツは、コールリッジ、ワーズワス、シェリー、キーツと比較しながら、タッカーマンが、これら英国ロマン派の詩人たちと、人間、自然、宇宙の理想に關して共通の憧憬と觀念を所有していたこと（WC・三）バイブルの「伝道の書」、ダンテの『神曲』Divine Comedy（一三〇四―一二）、ジョン・バニヤンの『聖戦』The Holy War（一六八二）、ウォルター・スコットの『海賊』The Pirate（一八二二）などの影響が彼の諸作に見られることを立証してくれた（WC・五他）が、「マーク・アサトン」には、ゲッツが、ウェストブルックがベルタを攫われて氣落ちする数行に、ワーズワスの「ミカエル」"Michael"（一八〇〇）の反響が單なるパロディではなく微妙な反応の姿でみられることを実証している（GR・六四）。種々様々な引喩の駆使、この技法と一見判明し難い詩法に拠ることも、タッカーマンの作品が少数の識者にしか認められないできた理由の一端ではなからうか。

『全詩集』には、次のラテン語の詩一篇とその作者に拠る英訳も収録されている。

聖母マリア讃歌 Hymn to the Virgin

*

並ぶことなき純潔の乙女マリア、
清浄な花にして北の空に輝く星、
人間たちの光を運ぶ

純潔の社

聖マリア、あなたは免罪の源であり、

また蜜と露のあふれる

慈悲の泉、

あなたは喜びを注ぎまわる

あなたは栄光に輝く王の門、

天界の美しさを

余すところなく纏い、

天頂にいてわれらを統べる方、

その頭には冠が輝いている。(CP.165-66) (戸部順一訳)⁽¹⁾

1. 現成城大学文芸学部長、西洋古典学教授。このラテン語の、A B A B C D C D C E F E F と押韻する十三行の詩の、同教授による「直訳」も参考までに掲げておこう。

あなた、処女の中の処女よ、
花であり海の星である方

人々の燈火を運ぶ方、

清浄の部屋、

あなたは聖マリア、免罪の泉、

蜜と露の泉、

慈悲の泉、

甘き喜びの酌取り、

栄光の王の門、

天の星のあらゆる美に

飾られ、

天空の頂で

花冠を戴いた姿で支配する。

* これをタッカーマン自身が英訳しているが、それは十四行(ラテン語詩より一行長い)で、A B C B D E B E F
G B G H G の脚韻構成 (B sea, purity, mercy, beauty,
E dew, too. G king, glorying, reigning.) ではない。

*

翻訳 Translation

御身、おお 処女をとめの中の処女 聖母、

星にして海の花よ！

人々の 灯火 を掲げる

純潔の神殿！

マリア、恩赦の泉、

蜜の露も甘美な泉、

寛容な慈悲の泉、

喜びに満ちた甘美の

調合者にして分与者でもある、

卓越した美の極みにある

華麗な王者の通用門、

燦然と輝き渡る星々！

西極の絶頂で

王冠を戴いて、御身は君臨し続け賜う。(CP.166)

* 自らのラテン語詩の殆ど直訳の英語詩であるが、「酌取り」「Pincerna」を「調合者にして分与者」「Mingler and dispenser」と作者自身は訳している。

十六歳でハーバード大学生になるまでに十二歳からヴァーモント州の私学で大学入学準備を始め、ボストンのラテン語学校にも通ったタッカーマンのラテン語の能力は、当時の一流の知識人の当然の素養の度を遙かに越えたものであつたろう。単語を並べただけのようにもみえる短詩にしろ、唯一篇だけラテン語で聖母讃歌をものして残した詩人の思いに、読者も自ずから思いを誘われる。

このラテン語詩とその英訳詩とは、タッカーマンの、亡妻ハンナへの思いが密かに托されたものだつたに相違あるまい。彼の、ハンナへの思いが滲む他の諸作品に散見するイメージと、これら二篇に集中するそれらとの類似性からみて。

汎愛は一人への愛から始まるにしても、若くして亡くなった妻一人への純粹な思いを、生涯独り静かに大自然の中で、心の奥深く徹底して深め続ける資質は、広く共感を得そうにみえながら、その実何だか近付き難くて、敬遠されがちになるのではあるまいか。そのような作者の資質が産み出す作品には、その真価を寛くは見せない性質が備わつてしまつてはなかつたか。このように筆者が考えるのも、同時代のニューイングランドの詩人、ホイットマンとディ

キンソンが二十世紀に入ってその真価を発見し直されて以来、アメリカ文学史上の巨星として輝き続ける中でのタッカーマンの現状を、遺憾とするからに他ならない。

グンヒルダ Gunhilda

★

グンヒルダ、我が愛と主題の貴婦人、

諸王の妹にしてデーン人⁽¹⁾の娘は

兄のハルデカヌート⁽²⁾によって婚約せられた、

フランスの彼、時の王者

通称ニジエールことフランスのアンリー⁽³⁾一世と、

並はずれて賢明なとまではいかぬ王子で、気分としては

脆弱で情熱に左右され、過剰で尊大、

だが、名誉好きで正義を愛してもいた、

もし残酷な法による歯止めが正しいとしても

その目的は彼の騒然たる治政下で

自らの王国を保持するため、フン族⁽⁴⁾を彼らが

拠点拠点からライン河を越えて怒濤の如く

襲来した際撃退するため、晩餐を楽しむため

地代と権利使用料を集めるため、

釣り合いを保って罰するため、そして奉仕に対して

しかるべく報いるためで、尤も唯、実際には

自らの紫衣を誠に厳かに剣で量って分配することを

知っていただけ、そしてあの人々の王様らしく

王の真珠を直ちに兜一杯に入れて

槍で王の黄金の深さを測るだけだった。

王女 はそうではなかった、そういう人に相応しい配偶者では、

気質の上でも年令の点でも。だがそれは何でもなかった、

彼は王であり求愛し、あるいは求愛しようとした。

ところが彼女は、誓いを立てた信仰者だった

己が美と若さを捧げるのは

神 へのみと。早々と抱いた望みは 神 に

家を建てて寄進することだった

王を知り 自らの知ったことを恐れて

こういう情報から身を逸らし、泣いて助けを求めた。

当然のことながら暴力を嫌悪して

世間と交渉を絶ち 陰で冷えびえと養育された

太陽から面をそむける尼僧⁽⁵⁾花のように。

それで王の炎立つ愛が修道院の

影で一時に燃え上ったのに 彼女の隠遁した心に
歓迎されなかつた驚きは 如何ばかりだったか？

そして壁に開いた窓からのような

昼の光が 弱つて充血した眼に入つた時も

幽かなはつきりしない光というよりは一撃を食らつたよう

だった！

そういうわけで 明日に疑いを抱き

現在と平和な過去を知っていると

幸福であり、如何なる変化も欲しないように

黄昏時の入江の岩々の間で

あるいは砂地の上で とりとめない物思いに耽りながら、
というの も そこは彼女の偉大な父親が大波に退れと命じ

た所だが、

グンヒルダは佇んでいた。そして思慮深い眼で

雲の中の衰えゆく色を凝視し、

波が巻きつくように押し寄せるのを、小石だらけの浜辺を

そして白波を越して走りゆく水を見詰めている間、

彼女の慈悲深い心は震え、恐怖は大きくなっていった。

しかし時はどんどん進んでいった、日程が定められ
アンリーは海を渡つて己が花嫁を求めてやつて来た。

僅かな猶予をその火と燃え立つ王は与えた、それで彼女は
端が見えない程遠くまで伸びる

黄金の布に乗つて己が運命へと歩んでいった

光で震える迫持と列柱を抜けながら

落すのだ、燃え立つ光が 露の中の日光のように

吊り下つてゐるようになつた所に 輝きと宝石の全てを！

高く張り出した玄関が華やいてゐたのだから 黄柘榴石⁽⁶⁾で

微石綿⁽⁷⁾で、苔瑪瑙⁽⁸⁾で、真珠母貝⁽⁹⁾で

星採光石⁽⁹⁾で、岩紅玉⁽¹⁰⁾で、床といえは

芳しい白檀材で紅花が散つてゐたのに埃の中で臭かつた。
壮麗な音楽が流れ剣ががちゃがちゃぶつかり合つていた、

かくして彼らは結婚しにぎにぎしく祝典がとり行われた。

彼らの幸せな歩みが遂に定まつたとは見えなかつた、

二人が王の官能に溺れた宮廷に着いた時も。

甚だ深々と彼は日ごと愛をぐいぐい飲みこんだものの

彼女の天使のような眼から満足は得られず

彼自身の眼には歡喜がいや増していたので、女王は

このような日光は永續きそうにないと恐れ始めたが、

案の定だった。変化と覺しきものが生じた。

おそらくそれは過剰な愛だったのだ、余りにも

甘美すぎる口付けの苦さだったか 単なる狂気の気紛れだ

った

己が妻の美貌の故に殺害したと

残酷な話が語られる男のように、その男は

彼女が屈んでいて氣付かぬうちに殺したのだ

彼女の項のあの白い奇跡に激怒して！

あるいは王は実のところ 自らの闇の心の中で己が心と

彼女の心を知っていたので、信じられなかったのだ、

彼には似つかわしくないあれ程の風格が、

優雅さが、善良さが、神々しいばかりの敬虔さが

自分のために、いや 自分のためにしる自分のためだけに

存在しつゝるなどとは

それである囁きが宮廷でさざめいた時、

女王は不実だ、自らの誓いを裏切っているというものだが

当の彼女にだけは それは当然ながら伝わらなかった。

そういう非難の出所や発信者は誰も知らなかったが

その矢が誰の弓で射られたかは 皆知っていた、

その意図も やはり少なからず重要だった、

その当時そのような非難に直面するのは

有罪を宣告されることだったのだから。

それで人々は 息を潜めて話し始めた

最後の審判 と 火の試練、

女子修道会と磔柱について。しかし彼らが

口を耳につけて、あるいはこそこそ群がつて

話を交わし 声低く、女王はこのせいで

咎め立てられるだろうか、どうなるのかと訝っている間に

布告が出された 王の命令によつて

彼の偉大なる慈悲で死は与えられないと

即座の死は その犯された罪にはと、

十日の猶予を置いて 正午の時間に

大義名分そのものが正さるべしと

それは野外での闘いの裁定により

闘士、武器、甲冑は各々の選択にまかすと。

というわけで、その布告の言うところでは

告発された者の擁護者である王の私に

申し開きを、もしそのようなものがあればだが、

その場所と時間に縷縷披露させることにしよう、

判者の面々の前で……それで神よ女王を援けたまえ！と。

神よ彼女を援けたまえ！か。成程、だつて救助は思われた

のだ、

天国のそれよりは遠く、地上から天国までより遠いと！

独りぼつちで、一人の友人も、友人の友人もない

他所者中の他所者一人！彼女のお付きの者

全ては、戻ってしまったか送り返されていて

唯一人残された小身の英国人ミメカンは

彼らが出かけた時は余りにも軽んじられており

彼女が引き出されて罪を問われる類たぐひのことを

疑つてみるには余りにも若すぎ、彼女が被つた

ばかりのこの危難を救うには余りにも弱すぎたのだ。

というわけでその哀れな女王は何一つ身を隠すもの無く

座つていた、頭の辺りに嵐が重なり屯たむろして

上空の雲の連なりを貫ぬき

峰から峰へ、穹窿から穹窿の極みまで

覆い隠す雲の頂や雲の裂け目から

雷鳴が轟き雷光が枝分れして閃光を発する間中。

アンリーも己が邸宅の天井の高い廊下を心安らかに歩け

なかつた。

腹が立つのは己自身にと世間に対してだつた、

非難されればやはり恐ろしいからで、弱者の常とは言え

呪つたり泣いたり、心の中で半ば苦悶に呻いたりした、

彼女には自分が確かな死刑を猶予したのだし

しかも全ては周知の事、そういうわけで時々王は

自らの考えを、耳の中の騒音を麻痺させて

直ちにラツパを全て吹き鳴らせと命じたり、かと思つと

葡萄酒に埋れて座り、昼の光を闇にしたり

さもなくば、火の燃えているランプの波打つ炎の中で

緋色に装つた少女の群を見詰めたりした、

それでもやはり味わつたり、触つたり、形、沈黙、音とか

暗闇や激しい肉欲の色合いなど全てから感じ取つていた、

死ねない青虫の目覚めを。

こうして朝となり その恐ろしい一日の闇が明けると
両者は共にほつとした、猶予が

永遠のものになるか、奇蹟が入り込んで来ない限り
彼女の苦痛が終りとなるかだ。

そういつわけで、決められていた時間と場所に

広大な中央広場の四方八方から どっと押し寄せて来た、

中央の静寂の辺りに吹きつけていた風のように

死の穏やかさが、というのもその中心には廷臣を全て

従えて王が着座しており 近くには居並んでいたからだ、

裁く者たちと裁かれる者たちが。グンヒルダはそこにいた

証言者の白衣をまとい、眼を伏せて、

独りで百合の花を一本手にして、

一度彼女は眼を上げ、素早く全体を見回した、

残忍な王、斧を手にした首切り役人、

一塊になった顔々と絶望を煽り立てる空を、

それから思いを巡らした イングランドに、自分の結婚の

日に、

これが 黄金の布が終ることだった。

それにしても何故 彼女の苦痛の度を引き延ばすのか？

悲嘆の情念を測り知れないまでに？

最初のラッパの挑戦に応じて闘技場に

大股で入ってきたのは 王側の闘士、巨漢で鉄胄の

黒装束で 胸には長々と銘入りの闘剣を捧げて

見下すように立ち止った、誰もやって来なかったからだ、

今一度、苦々し気にラッパが哀し気な響きを放ったが、

驚きが辺りを制したし憐れみもまた、

とその時、遙かな端から、女王の近くではなかったが

最後のラッパの指令に應えてミメカンが入って来た

小姓のような衣服で少女のようによるめきながら、

彼は身構えて交戦の辞を口にするや 小さな

装身具の刃を引き抜いた。相手の巨漢はにたりと笑うや

剣を振り上げて彼に突進し、再びにたりと笑った。

それから、その場でその少年の命を

石の間で踏みつぶさんものと、

あるいは彼をさげすみの一息で吹き飛ばさんとはかりに

切っ先を下げて立った。その途端、ミメカンは

跳ね返って、身を護りながら、後方から

相手が身を躲せぬうちに

踝を狙ってささやかな一撃で彼を倒した。

どつと大歓声が挙つて 天空を揺さぶつた

叫びにつぐ叫び、就中、王の大音声に勝るものなく
彼は彼女を胸に抱くべく王座を離れて

自らの身を以つて あらゆるものの保障を申し出た、
生命と愛を、宝石を、名状し難いまでの富を、

何しろ正義が成就されたのだからと！しかし彼女は直ちに
この俗っぽい王から身を背けて

誇りに満ちた別れの言葉を些か口にするのだつた。

「私は参ります

神の御元へ」と彼女は言つた、「そして去ることにします

この残酷な世界を、

御身が画策なさつた 私には何のためだか判りかねる

この恐ろしい恥だらけの残酷な光景を。

もし私が無実だとお信じになられたのならお生憎さま、

もし有罪ならどうして私が御身に相応しい妻になれるでし

ようか。

御身には私の歩みを遮りこの意志を変えさせることは出来

ません、

たとえ御身が王冠を私の通り路に投げ出そうとも！

あるいは私の足許に 道を閉ざそうとして

金の延べ棒、黒檀の塊、

巨大な蛋白石、紅玉、舶来真珠を山と振り注いで、

天国 は公正で、不正を見ようとはしないのですから。

ですからお氣をつけ遊ばせ、おお王様！ 神御自身が

何しろ神の御手に諸王の心や考えをお委ねですから、

御身の額から国王の王冠を、あの黄金の

伝来の冠を剥ぎ取つて、宝石類で

外側を覆つた 王笏 の柄を他に譲つてしまふなどという

目に逢われませんように！

私は行きます、私の地位を去るのです そうすればそこは

もつと価値の高いもので充たされるでしょう、そして御身

はお後釜の

御婦人にこれ以上公正になれないにしろ、少くとももつと

情深くあつて下さいまし。」

これで私の語る物語は終る。しかし彼女は

立ち去つて他の地域に加わり

他の人々と生き続けた、イモゲンと

ロトルド、ジセリダ、及び彼女

ムーア人アンダマナとして死んだ女と共に。その他の人々の中に、それも半ば戻りかけて、まるでもう一度

自分が背を向けて去ってゆく世界を一瞥するみたいに、あの女王が居る！

独りで百合の花を手にして、

グンヒルダが、私が愛して主題にする貴婦人が。

彼女は屹立している 豊かな悲し気な目で琥珀色の髪で。

(CP.187-93)

1. The Dane. 九 十一世紀頃、英国に侵入した北欧人。

2. Hardicanute. = Hardecnute(一〇一九? 四二)° デンマーク王(一〇三五 四二)・イングランド王(一〇四〇 四二)°

3. Henry the First of France(一〇〇八 六〇)° フランス王(一〇三三 六〇)°

4. the Hun. 四 五世紀に東部・中央ヨーロッパを支配した好戦的な北アジアの遊牧民族。五世紀のアッチラ王の時代が最有力。

5. sunflower. 一見 “sunflower”(ひまわり)の誤植

か?と思わせるような、作者の巧妙な造語 “nun”(尼僧) + “flower”(花)°。文字どおりに邦訳した。

6. essonite. = cinnamon stone, hessonite.

7. amianth. = amianthus. 石綿の微細種、繊維が細く、

可撓性に富む。

8. mossagate. 瑪瑙の一種、コケまたは樹枝状の模様

がある。

9. asterias. 未詳。仮訳。

10. rockrubies. 未詳。仮訳

11. balais ruby. = rubis balais (フランス語)

* 『全詩集』によつて初めて公刊された作品で、「ロトゥルダ」と共にヨーロッパの中世を題材に取った物語詩だが、リンチは「ロトゥルダ」と「マーク・アサトン」を一八六〇年刊行の私家版詩集全篇の中で興味深い作品として言及したエマソンだったら、この作品も目にしたらおそらくその標題を挙げただろう(Ⅰ・七九 八〇)とは言いながら無視した(Ⅰ・六五)し、ゴールデンも「ロトゥルダ」以外の物語詩は的外れで無駄な精力の消費だと見た(Ⅰ・G・

一二三)。しかしゲッツは、美しく気高い貴婦人を主題にした「グンヒルダ」をテニソンの叙事詩『王女』The Princess（一八四七）と比較しながら好意を以って論じている（GR・一六一 六三）。

「ロトゥルダ」、「グンヒルデ」共に、中世の貴婦人の巍然たる気高さを示す挿話を扱って甲乙つけ難い物語詩である。但し、いずれも最後の詩節、前者は「ここまでは伝説。だが」以下一四行が、後者は「これで私の語る物語は終る」以下の一〇行が、全てとは言わぬまでも、現代の文学観からは些か、蛇足の感なきにしもあらずだろう。文芸作品（に限らぬが）は、正に、「言い遂（おひ）せて何かある」なのだから。尤も傑作にはしばしば、余分と思われるかねない過剰な部分があることも事実である。

ある出来事 An Incident

*

それが起きたのは 国の真暗な恐怖と
困惑、危難の時にだった。脅しつけられて
その世界は息も絶え絶えになった、国内に、身近に

厳しい敵が、国外には更に残酷な友が、現われ、
希望も全くないようにみえた 天国の墓標の下には、
そのような疑惑の日には 黙（もた）したまま

私たちは離れ離れに歩いた その英国人と私は
低い平坦な森を、そこは私たちが進むにつれてますます盛
り上（あ）っていった。

彼は一廉（かど）の人物だった、国外移住者で自らを追放したのだ
大海原の向こうへと、漂ったまま彼は行先を気にかけず
己が国を憎み、我らの国も憎んでいた、

理解力の及ばない事柄が多く

何でも全て値踏みし、ごろつき、嘘つきを好まなかった、

その両者のどちらかを、多分、その両方を各々共に、

愛するのは人をではなく人間性をだった、

愛するのは白い 真実 で青年が新妻を愛するようにだつ

た

愛するのは太陽、地上、草木（グロフス）、俄雨で、
信じてもいたのだ 神と運命を

そして人生が大方は無益であることも。

「見たまえ」と遂に彼は言った。「兄弟喧嘩は

もう殆ど終りかけている、で 何が起きているかと言うと
この国はもう無くなつた、国旗は巻かれた！
となると 始まるのをほぼ見届けた我々の愚かな眼が
終りを見ることになるのだから？

アメリカよ！ 世界の中の国よ！

全体を変えてしまふ筈だつた世界の半分が、
あらゆる現代の時を開花させた模範が

三日咲きの薔薇のように落ちて粉々になるのか？

始まりは我々は見なかつたが 終りは見るのだ、

だが 地上には夜明けの気配はおよそ見当らないし

極から極に到るまで天空の雲の中にもない！

「そんなことはない！」と私は言つた、「いや、もしそうで

も、まだだ！

我々自身のは我々のものだ、だから私はまず忘れなければ
ならない、

私の 花 の花びら一枚捨てる前に

幸せな日々全てと幸せな若者の夢を、

あの 春 は再び戻ってくるし あの風は吹いてくるよ、

初めの頃の熱烈な希望が、揺ぎない信仰が、

我々が心で交わした深く感謝に充ちた誓いが、
そしてこれを限りに 危険に充ちた時間に割つて入り
彼女 と 真理 のために奮闘し打ち勝とう！

それで私は自らの 信条 が低いせいで頂垂れることにな
るのだろうか、

私自身の血！そんなことはない！その間も君は流れるか
一滴を勝利の神聖な驟雨に注げるかするのだから！

やはり私は彼と同じように考えなければならぬ 教えて
くれたのだから

真暗闇の時間は その日の直前に迫っているのだと、
で、もしその日が曇りで 国が食料不足なら

彼は遙かに予告する眼を注ぎながら見詰め続け

実りのない地上に もっとと稔り多い大地を見詰め

空に、空の彼方の空を 見るのだ！

そしてどんどん多くなり最も多くなつて、戦争で 奴隷
が始まつたのだ、

戦争で終らねばならぬ 彼の生命の誕生と彼の墓とは。

血液の中のように転がってその 王国 は憩いに到れよう、

火からのように冷されて その裂けた 国 は閉じるだ

ろつ、

そして戦場は、最近耕されたばかりの用地同様

一層新鮮な植物の群へ戻る筈だ それらが今存在していな

い所に。

聞くことはもはや無く、我々の苦悩に満ちた心は打ち勝つ

だろう

真夜中の襲撃に、小競り合いに、退却に、

こういうことは全て終らせよう 硝煙は漂い去り

先刻大砲が轟いていた所には牛が群がり啼くことだろうし

今あの 激しく行き交う剣が徹頭徹尾

汗ならぬ血しぶきを刈り取っている谷間では

農夫が再び鎌を振るうことになるだろう。

そして真赤な ストライプ 格闘 が怒りにまかせて闊歩し踏み躪つ

た所では

果樹園の木陰に小屋住いの家族が再び

小さな子供たちをかまうことになるだろう、まさに

小鳥の巢が馬の足跡の中に作られるように。」

彼は微笑んだ、が すると今度は遠く快い囁きが

再び生れ出て幽かに消え去るようにみえながら

遠方の山の微風のように我々の許に届いた。

彼は微笑んだが 答えなかった、それで私たちは曲りくね

って進んだ

尚も森の中を 疲れ切った足取りで

尚も森の中を、しかし後には元氣を出して

ようやく辿り着いた、木々を見下ろす高みに、

干からびた荒涼たる地点だった、見回す限り

暗々とした森の外れが迫っており 更に隔たった

土地の端に一本の松が二つに裂けて立っていた。

「君には では見つからないのかい」と彼は言った、「冬の

ぎりぎりの終りに

春 のあの黄金の恩寵は？ 君のかつての信条は？

若い時君が誓った恭順の誓約は？

ああ 今みたいに我々はぐずついていた、 氣に病んでい

てはいけな

我々の人生は失敗だった、實際、誇りも中途半端でとか

我々は場違いに骨折ったり愛したり苦しんできたのだと

絶望しきったり、悔恨のうちにたじろいではいけないよ」

山と、盛り上ってゆく森の彼方にあつて、

遠く一本離れて立つ松の肋骨の彼方にあつて、

突如 私^{そら}の逸した視野に飛び込んできたものがある

薄明の中を強烈に明滅する星一つ

一条の光線が霧の帷を揺るがしていた、

世界の希望を示す 眼に見える旗であり、萌しであり

血の色に輝く一刷毛の雲の下にあった。

(CP.195-98)

* この、アメリカの未来に対する恐れをアメリカ人の語り手と自ら国外移住者になった英国人との風変りな対話によつて表示した(WN・三〇九)全九〇行のブランク・ヴァースも、『全詩集』で初めて公刊された。この詩の草稿

の一つには「一八七三年二月七日」の日付けがある(G・九八)し、タッカーマンの会計帳簿の一冊には「この詩は一八七三年二月七日にSpringfield Republican 誌に送った

が、それには載らなかった」と記しており、南北戦争後十年経過していたが、まだ彼はこの戦争について思い巡らしていたわけだ(WN・三〇五)。この作品で作者は、南北戦争が終れば戦で荒廃した地域に平和と生命が回復する希望を強調し、最後の二行でアメリカの蘇生を象徴する心象^{イメージ}「薄明の中を強烈に明滅する星一つ」を空に見るのだ(G・九八)。

タッカーマンのソネット全五集を初めて一まとめにして公刊したウィター・ピナーは、この詩人が南北戦争後十年経つてその戦いについての作品を二篇「厳かに関心を持ち厳かに超然として」“gravely concerned and gravely abor”書いたのだとして、「ソネット第 集」の一・二の作品「(一)71-72」を挙げた(B・三三)が、むしろこの二篇は、己が 魂 思考 精神 の在り方を戦の心象を譬喩に用いて思索したものと看るべきだろう。

ソネット群の中で明白に南北戦争に関連した作品は、「ソネット第 集」の六と七で、この二篇は対になって、最愛の息子を戦死させた老父の痛恨の思いを描いて、静かに強烈な反戦詩になっている「(一)116」。

この二篇のソネットと、一八七〇年十月六日に町の広場で朗読した「頌歌 グリーンフィールド兵士記念碑に」「(三)74」親友の戦死を追悼した「ジー・ディー・ダブリュウ」「(三)82-84」及び、この「ある出来事」によつて、この隠遁 詩人は、心まで隠遁していたわけではないことを示したと言つてよいだろうか。

この作品をホイットリア(John Greenleaf Whittier, 1807-92) ホイットマン(Walt Whitman, 1819-92)との比較

にも及びながら詳しく分析・読解して（GD・一三四 四〇）、「この詩の結末は美しく表現されているが、永遠性を主張するつもりで結論は皮肉にも結論になっていない。南北戦争は希望を生み出したかも知れないが、その希望を確証するのは未来でしかない」と締め括ったゲロウブズは、作中の次の二行「…戦争で 奴隷 が始まったのだ／戦争で終らねばならぬ 彼の生命の誕生と彼の墓とは」が、ジョーンズ・ヴェリー（Jones Very, 1813-80） ハーバード大学でのタッカーマンの指導教師 からの十二年前の手紙（一八六一年四月二四日付）にあった文言「何と悲しく恐ろしいことか 我が国の状態は！ 奴隷制を保持してきた人々はこの国を戦火に巻き込むしかなかった。奴隷制は戦争のうちに初まった、だから今度は再び戦争を惹き起したのだ」を言い換えたものだと言っている（GD・一三七）。

作者の死の三か月前に書かれたこの作品には研究者は概ね好評で、リンチも、安易で殊更な楽観主義によっておそらく損なわれてはいようが、南北戦争に触発された優れた詩行があり、比較的成功している作品だ（L・六七）とする。本場に「安易で殊更な楽観主義」が見られるとするな

ら、タッカーマンは死の真近になってようやく、妻の死を境に一旦は失った希望を回復できたということになるだろうが、果してそうだろうか。作品から窺われる願望や希求を、事実と誤認してはならない。十年前の ある出来事を回想したこの作品に事実としての楽観主義を認めることは、筆者には残念ながら出来ないのである。

*

モマディ編『フレデリック・ゴダード・タッカーマン全詩集』（本稿では『全詩集』と略記）に収録されたタッカーマンの全詩集 「ソネット第 集」 集」の計一〇六篇とそれに含まれなかった五篇の総数一一一篇のソネット群と、それ以外の長短三八篇の詩（ラテン語の短詩一篇とその作者自身による英訳をそれぞれ一篇と数えて含む）の、本稿筆者による日本語訳は、これまでの拙稿（一）（四）と本稿（五）で完結した。その全篇の詩行総数、五、二七七行である。

（一）「希望回復への道程 フレデリック・ゴダード・タッカーマンの世界」（筑波大学文芸・言語学系紀要『文

藝言語研究・文藝篇』第四三号、一 一三四ページ、二〇〇三年三月刊)

(二)、「醒めた心酔、自然と愛への フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩」(成城大学文芸学部紀要『成城文藝』第一九〇号、一九 四二ページ、二〇〇五年三月刊)

(三)、「新たな相貌、物語り巧者としての フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩」(同、『成城文藝』第一九一号、三一 八五ページ、二〇〇五年六月刊)

(四)、「ある探求、裡なる火からの フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩」(同、『成城文藝』第一九二号、四八 八八ページ、二〇〇五年九月刊)

(五)、「不運なる幸運、時代に魅ることの フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩 完」(同、『成城文藝』第一九三号、一 三六ページ、二〇〇五年十二月刊)

【本稿】

これら(一)~(五)のどこに『全詩集』の各詩篇が訳載されているかを明記しておこう(添付数字は収載ページの表示)。

『全詩集』

「ソネット第 集 一八五四 一八六〇(一 二十八)」

「ソネット第 集 一八五四 一八六〇(一 三十七)」 26

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十五)」 57

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十)」 70

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 79

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「ソネット第 集 一八六〇 一八七二(一 十六)」 93

「至高のもの」	“The Superlative”	(一)	31	32
「ソネット一篇」	“Sonnets”	(一)	102	104
「問い掛け」	“The Question”	(一)	32	36
「たそがれ時」	“Twilight”	(一)	36	40
「エリドール」	“Elidore”	(三)	31	33
「森の空き地」	“The Clearing”	(三)	33	37
「川に寄せぬ」	“To the River”	(三)	37	41
「自然の深み」	かゝる魂 “A Soul That out of NA- TURE’S DEEP”	(四)	48	60
「見知らぬ人」	“The Stranger”	(三)	41	47
「女生徒 ある牧歌」	“The School Girl: An Idyll”	(二)		
47	52			
「コーヒー豆の試供品 詩に作つてと作者に送られてきた 即ち、酒場の主人、行商人、及び詩人」	“A Sample of Coffee Beans, Sent to the Author with a Request for a Poem: or, The Publican, the Peddler, and the Poet”	(四)	61	69
「ある末日聖徒」	“A Latter-day Saint”	(三)	52	55
「誰にもの批評家」	“Anybody’s Critic”	(一)	40	42
「ロトウルダ」	“Rhotruda”	(三)	55	60

「コラーリ」	“Coralie”	(三)	55	62
「時折り小森の中へ」	“As Sometimes in a Grove”	(四)		
69	76			
「マーク・アサートン」	“Mark Atherton”	(五)	1	8
「シドニー」	“Sidney”	(三)	62	66
「慰安」	“Refrigerium”	(三)	66	67
「老乞食」	“The Old Beggar”	(三)	67	69
「フランチェスカへ パオロ」	“Paulo to Francesca”	(三)	69	71
78				
「仄暗い日が 世界には」	“When the Dim Day”	(四)		76
「聖母マリヤ讃歌」	“Hymn to the Virgin”	[引合へ語の註]		
(五)	11			
「翻訳」	“Translation”	(五)	12	
「マルギテース」	“Margites”	(三)	71	74
「頌歌 グリーンフィールド兵士記念碑に」	“Ode: For the Greenfield Soldiers Monument”	(三)	74	
「ハリエンジュの花の下で」	“Under the Locust Blossoms”	(三)	75	
「ヴァージニア州ブルーリッシュで書いた詩」	“Lines Writ-			

ten in the Blue Ridge, Virginia	(四)	78
「海辺」"The Shore"	(三)	77
「自然と必然性」"Nature and Necessity"	(三)	77
「ジー・ディー・ダンロー」"G.D.W."	(三)	82
「グンヒルダ」"Gumhilda"	(五)	19
「ロング・アイランド」"Long Island I.I.I.I."		
「ソネット三篇」(この三篇のソネットは「ソネット 第集」の十一、十二、十三と殆ど同じ作品だが、異本 として『全詩集』のここに収録されているものだろう。 本稿の筆者は同一作と見て敢えて訳出しなかった。)		
「ある出来事」"An Incident"	(五)	24
		以上

*

タッカーマンの遺稿を収めた紙挟みの中に他の草稿と共に、「詩」"Poetry"と題された詩の最初の十八行分を含んだ手紙(誰宛てのものは宛名がなくて不明)。「私はこの詩行に手を入れようと努めました。もっと増しな形に直すとは思わないし、素材を無駄使いしたくないのですが」と始まる。の断片が入っていた(CP:205-6)。

文面から察するに、誰か知友の詩人にこの詩を見せたら、

この語は不賛成だ、この詩句は好きでない、などとかかなり詳細な感想を述べられたものとみえる。それに対する作者タッカーマンの応答の文章である。最初の六行は手を入れなかった、七行目は良くなったと思う、八行目は改善できない。「滝」"cascades"「九行目末語」は私は非常に好きというわけではないが、押韻「二行上の"evades"と韻を踏む」のためには許されるだろうか。君が不賛成だという「やちやらいつ」"Rustling"はこのままにした。まず文脈から自ずから当然だと思われるからだし、二番目にはエマソン氏が次のように「彼の詩から二行を引用して」述べているからだし、三番目の理由としては、先日読んだある古謡(標題は判読不能)で同じ表現がこんなに「四行引用」美しく使われているからだ、といった具合である。以下もシェリーやオシアン、シェイクスピア、ロングフェローなどを引き合いに出しながら、この手紙に引用していない20、21、23、26、27行目の詩句について「従って27行以上の詩だったわけだが」自分が手を入れなかったり改作したりした理由を事細かに説明し、あるいは相手が反対した理由が分らないと述べて、それについて相手の意見・感想を求め

途中でばつんと切れていて、まさに断片そのものであるが、タッカーマンの詩作の姿勢や推敲の在り方について示唆するところが少なくない。意味の上でも感情の点でも当然この詩句にならざるを得ないということを重視し、語句の選択には作者個人の好悪や意味よりも韻律を優先することがあるし、優れた先人の詩句を絶えず念頭に思い浮かべて点検・吟味しながら詩作した詩人であることが窺えるであろう。尚、この断片で言及されている「エマソン氏」は、無論、タッカーマンから私家版『詩集』（一八六〇）を進呈されてそれを賞讃し、その中の一篇「ロトゥルダ」が月刊「アトランティック」誌に再録されるよう尽力したあのエマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）である（拙稿（一）127、（三）60参照）。

★

タッカーマンの評価の歴史については、拙稿（一）128 131に詳述したとおりだが、その（一）の公刊後、同年の二〇〇三年に、『アメリカ三詩人 メルヴィル、タッカーマン、及びロビンソン』なる編著（B J）が、ペンギンブックスから出版された。

世界中を旅した後、退いて不思議な一層見事な果実を稔らせたメルヴィル、テニスとの三日間の出逢いという大きな旅で自信と靈感を得て隠遁へ戻り、若妻の急死で悲嘆のどん底へ落とされたタッカーマン、誰にも見えない森を抜けて新超絶主義流の想像力を産む家へと内面の旅を続けたロビンソン、この 孤独 を共通項とすると序文で謳う三人の詩華集は、就中、タッカーマンがその一人に選ばれていることで画期的な一冊となった。

ここには、入念な本文校訂が施された上で、ソネット全五集の全一〇六篇中、第 集の三七篇全てを含む総計七十七篇と、その他のソネット五篇の他、「靈感」「たそがれ時」「見知らぬ人」「女生徒 ある牧歌」「ロトゥルダ」「シドニー」「フランチェスカへ パオロ」と「マルギテース」が採られている。大変優れた選択ぶりであり、各々行き届いた注が付いていて、絶版となったままのモマディ編『全詩集』に替って現在望み得る最良のタッカーマン作品集である。

この編著のうち特にタッカーマンに焦点を当てた、作家アラン・ホリンガースト（Alan Hollinghurst）の「ある見知らぬ人との昵懇」「Intimacy with a stranger」と題する長

文の紹介記事が、二〇〇四年一月三十一日の「ガーディアン」紙 The Guardian に載ったのも幸いであつた。今後のタッカーマンの浮上ぶりが期待される。

実は本邦には、夙に今から三五年も前に、亀井俊介の瞳目すべき見事なタッカーマン紹介論文（K・五六八七〇）が存在する。それを誠に迂闊の極みながら、筆者は本稿を擲筆する寸前まで知らなかった。GDが書誌に挙げていたというのに。恥じ入るばかりである。

幅広い視野からの深い洞察力で知られるこの慧眼な論者は、タッカーマンの詩を読んで「紹介文ではいかにしても伝え得ないたぐいの、実作品を苦勞して読んだ人へのみじわじわと感得されるたぐいの地味な驚き」（K・五六八）に打たれたという。「形式との緊張関係それ自体によつて、彼の心の緊張を表現していた」（K・五六九）。「自己を精一杯客観的に測定しようとしていた」（同）。ソネット第集二二、第集三七、第集一五、各篇の原詩を丸ごと紹介しながら、タッカーマンの詩の身上である「ロマンティックな夢とリアリステイックな自己凝視との緊張関係」が「実に美しく表現されている」（K・五七〇）と言ひ、タッカーマンはホイットマンとディキンソンとを繋ぐ位置に立

つ重要な詩人であり、「ホイットマンの詩的野心と、生の絶対的肯定への意欲とをひめながらディキンソンのきびしい自己認識をわがち持ち、つつましく、しかも堂々と、生の尊厳を表現したのである」（同）と結んでいた。誠に言い得て妙なる名文であつた。尚、筆者が拙稿（一）で全面的に依拠したゴールデンのタッカーマン論（G）に対して、玉石混淆の観のあるトウエイン叢書の中でまず玉の一冊だと思ふ、なる付記にも全く同感である。

思つに、亀井論文の見るタッカーマンの特質も、慧眼の士にしか見え難いもので、それもこの詩人を、文学史上沈ませてきた要素の一つだろう。

ソネット全一一篇のうち同じ脚韻構成のものが見当たらないような配慮といい、韻の乱れや形式の崩れにより、あるいは、該博な知識による引喩の駆使や特異な新鮮な譬喩の創造によつて内容の幅を拡げ興行きを深める実験 といった、要するにタッカーマンは、自らは殆どまず知ることなく時代を先取りしていたのである。彼の不幸であり且つ幸いでもあつたと言ふべきだろう。没後百三十余年経て、彼は今度こそ、文学史上の輝く「星」の一つになりそうなのだから。

★

アメリカのソネット作者（G二）タッカーマンの全詩業の出発点を象徴的に示す作品は、やはり「ソネット第集・一」の十四行詩である。最後にそれ「拙稿（一）2、3、の改訂版」を今一度示しておこう。

ソネット第 集・一

時折り、小川や木陰の側をゆくり曲がりくねって歩き
為すなく草を踏みしめながら 何の役に立つのかと
私は訊ねてみる、こんな臃な物想いが、心配や怖れが、
たとえ私が堤という堤から花を 赤根草、王様蘭
はたまた薄青いツメクサを 引き抜いては

考え考え涙を催しながら自作詩に嵌め込んでみて 何だ
というのか。

自らの死を歌い思いを凝らし悼むのに、湿った庭の小径で
秋風が枯れた草花を嘆き悲しむ時のような

詩が生れる息遣いをしてみて

どれ程の値打ちがあるだろうか。何の役に立つのか

白鳥の声といえど誰もが聞き損うのなら。

あるいはその雄飛の姿も 混り合つてゆく青色の中で

誰からも注目されないなら。それでもそれ程甘えていると

神は神ではなくなるう、神とは 知つても知ることはないのだ。

らないのだ。

タッカーマン略年譜

一八二二年 二月四日 フレデリック・ゴダード・タッカーマン、マサチューセッツ州ボストンで生れる。監督教会員で、織物・反物類輸入卸売業者として成功した裕福な商人エドワード（一七七五年二月二日生）とその二番目の妻ソファア・メイとの三男一女の第三男で、氷が四五 cm も厚く張つた厳寒の日であつた。長兄エドワード「父と同名」（一八一七年二月七日生 一八八六年三月一五日没） 後年アマスト大学植物学教授、次兄サミュエル・パークマン（一八一九年二月一日生 一八九〇年六月三〇日没） 後に著名なオルガン奏者、音楽学者。一年五か月後（一八三二年七月）、妹ソファア・メイ「母と同名」 後にデイヴィッド・エックリー牧師

夫人　が生れた。尚、彼らの異母姉ハンナ（一八〇五年生）がいた。父が最初に結婚（一七九八年二月一九日）したハンナ・パークマン（一八一四年二月没）との間の娘である。父はフレデリックたちの母と一八一七年一月二八日に再婚した。その母は、独立戦争時の大佐であったジョン・メイの娘で、十二人の兄弟姉妹の六番目の子供、社交性・外向性の陽気な、自説に固執する、娯楽好き旅好きの、機智に富む、教養のある、音楽・絵画など芸術の才に恵まれた、観察力・描写力に優れた婦人で、その資質は子供たちに受け継がれた。

一八三三年　ヴァーモント州バーリントンの私塾「ビショップ・ホプキンス」で大学入学準備を開始する。

一八三七年　ハーバード大学に入学。指導教師はセイレム出身の神秘詩人ジョーンズ・ウェリー（Jones Very, 1813-80）、級友には、エミリー・ディキンソンが師と仰いで文通を続け、彼女亡き後その詩集を編んだ牧師・文筆家の T・W・ヒギンソン（Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911）がいた。

一八三八年　同大学中退。眼疾のためとされる。

一八三九年　ハーバード大学法科専門校（ロー・スクー

ル）に入学し直す。

一八四三年　同校卒業。五月二九日、父エドワード死去。七月に、三十八歳の義姉ハンナがニューヨーク市立大学教授のサイラス・メイソン博士と結婚して家を去る。

一八四四年　マサチューセッツ州サフォーク郡の弁護士会に所属。九月、一家の古くからの友人で級友の父でもあったボストンのエドワード・D・ソヒヤーの事務所勤務を始めるも、弁護士家業は性に合わないと感じて一年後にやめる。以後は、天文学、植物学の研究と詩作に専念する。

一八四七年　二月、後に南北戦争時に將軍になるグリーンフィールド（マサチューセッツ州西部の町）のデイヴィッド・S・ジョーンズ（David S. Jones）から三千ドルで家を購入してボストンからその地に移る。六月一七日、彼の娘ハンナ・ルシンダ（Hannah Lucinda）ジョーンズ（一八二七年七月一〇生）と結婚。

残っている小さな肖像画の彼女は、小さく尖った額の卵形の顔をした上品でにやかな若々しい女性で、両肩は紗のような薄手のモスリンを優美に纏った低い首筋へとなだれている。長い黒髪を当時の流行に従って真中で

分けて、滑らかに両耳を覆ったその髪は頭の後で柔らかなロールパンのように結っている。細っそりした鷲鼻で著しく優しい表情をしている。打ち解け難く自意識の強いタッカーマンにとって、彼女は天啓のような存在で、彼は彼女をアンナと呼び慣わした(WN・一六四)。二人は限りなく琴瑟相合す夫婦となる。

一八四八年 六月二十九日、最初の娘誕生。しかし死産か、もしくは生後まもなく死去。「(一)の年譜の記述は誤り」

一八五〇年 二月一三日、長男エドワード誕生。「リッテル・リヴィング・エイジ」誌十月一九日号に、タッカーマンの詩「イワナシ」が初めて掲載される。テニスの詩集を入手して熟読し始める。

一八五一年 五月、七月、母に付き添ってスコットランドやイングランドへ海外旅行する。彼にとつては好きな英国詩人幾人かの所縁^{ゆかり}の地を訪う巡礼の旅で、興味津々たる「植物標本集^{ハーバリアル}」を作成してそれに、その旅先で採集した野の草花の押し葉や花を入念な記録共々収めた。イートン、グレイの墓、シェイクスピアの生地ストラットフォード・アポン・エイボン、ソールズベリ、ストーンヘンジ、ケンブリッジ大学のクライスト学寮などを訪れ、

そこではミルトンを記念して桑の木から小枝を折り取ってきたりした。ハンナは実家の両親の許で幼児のエドワードと留守を守った。

一八五三年 三月二十九日、次女ハンナ(本人は自らをアンナと呼ぶ)誕生。

一八五四年 秋から翌年二月にかけて二度目の海外旅行。今度は妻ハンナを同伴。ウインザーで教会音楽を勉強中の次兄パークマンを訪ねて母がまたイングランドへ出かけたのを機に、彼もハンナと共に七月二六日ニューヨークを出港、リバプールに八月六日着、二人はスコットランドへ旅し、ロンドンへ上って母と会い、一緒にウインザーへ次兄を訪問した。その後、彼とハンナはヨーロッパ旅行に出かけ、スウィスでは「雪の中でクロツカス」を摘み、イタリアではヴェスヴィオス火山に登り、シェリーやキーツの墓を訪い、この夫妻は仲睦く大陸からパリを経由してロンドンへ帰ってくる。ハンナは翌年一月二一日付の実家の母宛て書翰で、パークマンと夫がワイト島へ木曜日に出かけて明日帰る予定と伝えている。タッカーマンはイングランド南岸沖のワイト島西岸にあった桂冠詩人アルフレッド・テニスの邸宅の客となつた。

て三日間忘れ難い時を過ごした。その後長く続く友情が始まる。彼とハンナは一八五五年二月初め頃、帰国。半年を越える夫婦の海外旅行であった。

一八五七年 五月七日、次男フレデリック誕生（一九二九年一月八日没）。その五日後の一二日、妻ハンナが産後の併発症で急逝。三十歳に二か月足りない若死であり、十年に一か月満たない結婚生活であった。彼は妻の墓碑銘にエレミヤの嘆きからの一節 「道行く全ての人よ 心して尋ねても見よ 吾が悲痛に至ったほどの悲痛が果たしてこの世にあるものかどくか」 "Behold and see all ye that pass by, if there be any sorrow like unto my sorrow." (Lamentations of Jeremiah, 1:12) を刻ませた。

一八六〇年 『詩集』（ソネット第、第 集の他、物語詩などを収録）の私家版刊行。タッカーマンのソネット第 集、特に亡妻の追悼・追憶色濃厚な第 集の、模範となったものもあつたとしたら、それはデニソンの名作、親友追悼詩集『イン・メモリアム』（一八五〇年）だったであろう（S・一八六）。

一八六三年 同詩集の英国版、ロンドンで刊行。

一八六四年 同詩集の最初のアメリカ版、ボストンで刊行。
一八六七年 二十年間居住したグリーンフィールドを去る計画を立てる。ナサニエル・ホーソン夫人（ホーソンは三年前に死去）と、そのコンコードの邸宅「ウェイサイド」を購入する件で文通（八月二五日付と翌年四月五日付）。

一八六九年 『詩集』のアメリカ版、別の出版社から再版される。

一八七〇年 タッカーマンの母死去。十月六日、「頌歌
グリーンフィールド兵士記念碑に」を町の広場の儀式で朗読。

一八七一年 長男エドワード、二一歳で死去。前年の母の死同様、この長男の夭逝も彼の詩作への反映は殆ど見られない。肉親の死を詩で悼むのは、妻の場合だけで十分すぎたのだろうか。コンコードへ引越すことを断念。四月にグリーンフィールドの家を売り払って、町なかの下宿屋に移り、死までそこに居住する。

一八七三年 五月九日、タッカーマン心臓病で死去。享年五二歳三か月。「フェデラル・ストリート墓地」に埋葬される。ソネット第 集三十二の最初の二行 「ああ

恋しい あの顔と足取りが！ 人生のこまなく／幸せな
真盛りを 私たちを見詰めていた森と海辺は」“O for
the face and footstep! woods and shores/That looked
upon us in life's happiest flush,” が、彼の墓石に刻
まれた。

(拙稿①の略号語を WZ' その他で補加・修正した)

参考文献

以下、拙稿①～⑤の言及・引用した参考文献の類は、
頭略記号で表わすこととし、後述ページで数語で表示す
る。(①の参考文献を増補した)。

- B The Sonnets of Frederick Goddard Tuckerman. Ed. by
Witter Bynner. New York: Alfred A. Knopf, 1931.
- B・A Oxford Anthology of American Literature. Ed. by
William Rose Benét and Norman Holmes Pearson.
New York : Oxford University Press, 1938. 2 vols.
- B ③ Three American Poets : Melville, Tuckerman and Rob-
inson. Ed. by Jonathan Bean. London : Penguin Books,

2003.

- B R Massachusetts : A Guide to the Pilgrim State. Ed. by
Ray Bearse. Boston : Houghton Mifflin Co., 1971.
- B ③ BROOKS, VAN WYCK, New England : Indian Summer,
1865-1915. New York : E. P. Dutton and Co., 1940.
- B ③ BENÉT, WILLIAM ROSE, "Round about Parnassus,"The
Saturday Review of Literature, VII (February 7, 1931),
584.
- ③ CLARK, MARGARET TUCKERMAN, "A Hawthorne Letter,"
The Yale Review, XXIII (September, 1933), 214-15.
- ③ ④ The Complete Poems of Frederick Goddard Tuck-
erman. Ed. by N. Scott Momaday. New York: Oxford
University Press, 1965. **邦語訳本トクマン**。
- ③ EATON, WALTER PRICHARD, "A Forgotten American
Poet," The Forum, XLI (January, 1909), 62-70.
- ③ ⑤ England, George Eugene, Jr., Beyond the Romantic
Dilemma : A Study of the Poetry of Frederick Goddard
Tuckerman. Diss. Stanford University, 1974. Ann Ar-
bor : UMI, 1974.
- ③ ⑤ | , "Tuckerman's Sonnet I : 10 : The First

- Post-Symbolist Poem," *Southern Review* 12 (2) (Spring 1976): 323-47.
- ㄱㄹ EBBEHAART, RICHARD, "A Quiet Tone From a Rich Interior," *New York Times Book Review*, (June 20, 1965), 5.
- ㄱ GOLDEN, SAMUEL A., *Frederick Goddard Tuckerman. New York: Twayne Publishers, Inc., 1966.*
- ㄱ | , "Frederick Goddard Tuckerman: A Neglected Poet," *The New England Quarterly*, XXIX (September, 1956), 381-93.
- ㄱ | | , "Frederick Goddard Tuckerman: An American Sonneteer." *University of Maine Bulletin*. 54: 12 (April 1952). *University of Maine Studies, Second Series*, No.66.
- ㄱㄷ Groves, Jeffrey David, *Frederick Goddard Tuckerman in the Canon of American Literature*. Diss.Claremont Graduate School, 1987. Ann Arbor: UMI, 1987.
- ㄱㄹ Getz, John Raymond, *The Originality of Frederick Goddard Tuckerman*. Diss. *University of Pennsylvania*, 1977. Ann Arbor: UMI, 1977.
- ㅈ HOWE, IRVING, "An American Poet," *The New York Review of Books*, (March 25, 1965), 17-19.
- ㅋ 蘭井發心「Frederick Goddard Tuckerman 〇註」『域語書冊』 集 | | 七卷 集 | 〇 叩 (| 九七〇) 五六八 七〇°
- ┘ Lynch, Thomas Patrick, "Quick Fire for Frost": A Study of The Poetry of Frederick Goddard Tuckerman. Diss. *Columbia University*, 1969. Ann Arbor: UMI, 1972.
- ㄹ MARCUS, MORDECAI, "Frederick Goddard Tuckerman's 'The Cricket': an Introductory Note," *The Massachusetts Review*, II (Autumn, 1960), 33-38.
- ㄹㅈ MORRISON, THEODORE, "The Sonnets of Frederick Goddard Tuckerman," *The Bookman*, LXXIII (March -August, 1931), 205-6.
- ㅈ "Book Notes", (unsigned review) *The New Republic*, LXIX (November 18, 1931), 26-7.
- ㄹ PERRY, BLISS, *The American Spirit in Literature*. New Haven, 1921.
- ㄹ REDMAN, BEN RAY, "Old Wine in New Bottles," *New York Herald Tribune Books*, VII (June 7, 1931), 12.

5 Seed, David, "Alone with God and Nature : The Poetry of Jones Very and Frederick Goddard Tuckerman." *Nineteenth-Century American Poetry*. Ed. by A. Robert Lee. Totowa, NJ : Barnes & Noble, 1985. 166-93.

1 "A Contemporary of Lowell and Whittier." (unsigned review) *New York Times Book Review*, (May 24, 1931). 12.

2 An *Anthology of the New England Poets from Colonial Times to the Present Day*. Ed. by Louis Untermeyer. New York : Random House, 1948.

3 WILSON, EDMUND, Patriotic Gore. New York : Oxford University Press, 1962.

4 WALTON, EDA LOU, "A Neglected Poet," *The Nation*, CXXXIII (September 2, 1931), 234-35.

5 Weintz, Christian, Frederick Goddard Tuckerman : The Wisdom of Perfected Grief. Diss. University of Minnesota. 1970. Ann Arbor : UMI, 1970.

6 Poetry of the New England Renaissance (1790-1890). Ed. by George F. Whicher. New York : Rinehart and

Co., 1950.

7 Wilcoxson, Catherine Ann, "Shooting the Void" : The Life and Work of Frederick Goddard Tuckerman. Diss. University of Virginia 1992. Ann Arbor : UMI, 1992.

8 WINTERS, YVOR, "A Discovery," *The Hudson Review*, III (Autumn, 1950), 453-58. Review of *The Cricket*.
9 , Maule's Curse. Norfolk, Conn. : New Directions, 1938. p.125n.

(ロンドン・エクスポート入手は、元同僚の宮本陽一郎筑波大学教
授の御尽力に拠る。記しつつその親切に深謝申し上げます。)